View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kanazawa University Repository for Academic Resources

こだま

第173号
2011. 1
ISSN 0915-8782
金沢大学附属図書館報 “こだま”
http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp

CONTENTS

巻頭対談 ……1
学外から電子ジャーナルを読むための2つの方法 …4
ラーニング・コモンズKULiC-α活動報告 ……6
金大生のための読書案内 ……7
トピックス ……8

巻頭対談 －金沢21世紀美術館に学ぶ－

魅力ある知的空間とは

金沢21世紀美術館館長
秋元 雄史

あきもと　ゆうじ
国吉泰雄美術館，ベネッセアートサイト直島の企画運営に携わり，2004年から2006年まで地中美術館館長を務めた。2007年4月より金沢21世紀美術館館長に就任。

しばた まさよし
金沢大学教授。2008年より金沢大学人文学類長（文学部長兼任）と金沢大学附属図書館長を兼任している。

金沢大学附属図書館長
柴田 正良

2回目の対談となります今回は，金沢21世紀美術館の秋元館長を対談の場「ほん和かふぇ。」にお招きしました。コーヒーを飲み，リラックスした雰囲気の中で金沢21世紀美術館の魅力や，知的創造空間としての美術館，図書館について刺激的なお話をうかがいたいと思います。　　司会：岡部幸祐（情報サービス課長）

古典的観賞スタイルからの逸脱

―― 現代美術を展示している金沢21世紀美術館には年間150万人もの入館者があります。これは他に例の無いことだと思うのですが，何か理由はありますか？

秋元●よくその質問を受けますが，実のところよくわからないんです。ただ推し量ると，子供や若い人向けのプログラムが沢山あって，それが時代の動きというか需要にフィットしたのかなとは感じます。入館者の中には，いわゆる現代美術のコアなファンはもちろんのこと，知的好奇心をくすぐられるものに反応するような人たちが含まれている，そんな感じなんだろうと思います。

柴田●現代美術は，もともと子供受けというか若者受けする要素があるような気がします。いわゆる普通の美術好きの人たちの中で，現代美術好きというコアなファンは少数集団ですよね。でも現代美術というのは子供向けの側面があって，子供はもちろんのこと，若いお母さんも子供目線で楽しめるといったところがあると思うんです。

秋元●そうですね。でもその考えに至るのに時間がかかったんです。今までの美術館は教養主義の延長線上に捉えられていて，来館者にある一定の知的レベルというか，文化的に成熟した人間性を求めていたんです。そういうお客さんのニーズに合わせて美術館をつくろうとすると，今の21世紀美術館は出来なかったと思います。

柴田●21世紀美術館は建築としてもおもしろいですね。美術館というとアメリカのメトロポリタン美術館のようにギリシャ神殿風の荘厳な建物が思い浮かぶんです。そこでは美の遺産に対して畏れ敬い，ひれ伏すって感じですよね。でも最近はそうじゃない。若い人たちはありがたがって祭り上げるのではなく，美術館という空間を使いこなして，自分達がくつろげる空間にしてしまっている。

秋元●まさにその通りですね。21世紀美術館は，最初から子供や若い人をターゲットにつくったわけではなく，まず現代美術の活きのいいところをどんどん紹介していこうよと。そうしたらメトロポリタンに置いてある文化遺産的なものではなく，なんだかよくわからない雑多のものが集まったわけです。そこに一番反応したのが子供と若い人だった。そこを真面目に突きつめていったら，こうワッと広がっちゃったみたいな感じです。で，静かに芸術作品を見るといった観賞スタイルから逸脱しちゃったみたいな（笑）。

柴田●確かに古典的な美術館の概念からすると逸脱していますよね（笑）。

秋元●やっぱりそう見られてますか。開館当初はアカデミックな先生方から「あれは美術館とは呼ばないのでは？」といった見方をされていましたけど，最近はその見方が大分変わってきたように思います。また，街づくり系のアートをしている人達，つまりアートを単に見せるのではなく，社会に還元していきたいと考えている若い人達が21世紀美術館のような取り組みを取り入れて，広がりを見せていっているんです。そんな動きもあって，「何かある」と思ってもらえるようになりましたね。

柴田●21世紀美術館では何か動いてる，と。正確なアナロジーではないですが，ここ（「ほん和かふぇ。」を含むブックラウンジ）も本来の図書館ではないだろうと言われています。逸脱している，と。今までの大学図書館は人類の知的遺産がしっかりと保存され，そこに学生が入ってきて，本を読ませていただきます，みたいな利用スタイルだった。でも最近はそういうのであるよりは，場所として使いこなすといったような利用スタイルになっている。蓄えられているデータを使いながら自分たちなりのものを軽いフットワークで発信していく。そういう空間として使いたい，と。利用者の行動が受動的なものから能動的なものに変わった感じです。

秋元●まさにそうですね。みんな主役になれるから来てると思うんです。ありがたいものを“見させられてる”というよりも，自由な見方ができたり，ワークショップに参加したり，色々自分達でやれちゃうわけじゃないですか。そういうところが面白い。あと，若くして世界のトップレベルで活躍しているアーティストがきて，絡めるわけなんですよね。単にアマチュアが集まっているだけでなくて，開かれている空間があって，そこにいつも刺激が持ち込まれる。このあたりが来館者を惹きつけている要因ですかね。

人間とは文化的な生き物である

柴田●究極的には美術も文学も「いらないや」って言われるものですよね。ご飯さえ食べれればいいじゃないかと（笑）。そういうわけでもないだろうとは思うのですが，21世紀美術館としては，人々の生活の中にどのような位置を占めるのが理想ですか？

秋元●難しい質問ですね。確かに食べることだけを考えれば，大学も美術館もいらないって言われればいらないですよね。でもこれだけ成熟してきた社会の中で，食べてるだけの人はいないと思うんです。歴史を振り返ってみても，食べてるだけの人がいたかというと，それも怪しいですよね。なにがしかの文化的な活動があったと思います。私としては，生物としてのヒトの上に文化がのっかっていると考えないようにしたほうがいいと思いますね。人間そのものが文化的な生き物なので。

柴田●なるほど。私の専門は哲学ですが，一番いらないと言われる分野なんです。でも，そういう芸術とか文学とか，あるいは抽象的な思考の楽しみが組み込まれていない人生は存在しないと思うんです。あとは，それをどうやって説明して共感を持ってもらえるか，そしていか

にバックアップをしてもらうか，だと思うんです。

秋元●そうですね。でも金沢は，もともと文化的なものに関して理解がある土壌なので，ある一定の成果を出していればバックアップしてくれます。私が最近ウェイトを置いているのは「友の会」[*1]の人数で，これはつまり21世紀美術館を支えてくれるコアなファンがどれだけいるかということです。図書館でいえば，大学がなくなっても図書館に通いたいと思ってくれている人たちのことですね。フローのお客さんは動きが掴みにくいので，コアファンをどれだけ増やせるかが重要だと思います。小さなイベントだと，「友の会」に広報しただけで埋まってしまいますね。

柴田●(司会に)図書館には，そういうファンいるの？

―― いませんね……つくりましょう！

秋元●コアファンがいれば，職員のモチベーションが上がりますよ。大学図書館は市民の方にはまだ近づきがたいイメージがあるので，まずは学生さんや卒業生なんかが狙いどころじゃないでしょうか。

フレキシビリティのある空間づくり

柴田●空間として，美術館のような図書館というのが私の求めるイメージなんです。そのような図書館にしたい。21世紀美術館は，確か，公園のような美術館というのが建築コンセプトでしたよね。秋元館長は，空間的には図書館に対してどんなものを期待されますか？

秋元●公園のいいところって勝手に自分の場所が作れる，というところだと思います。図書館もできるだけそういうふうにフレキシビリティを持った，つまり係わる側が工夫できる余地を残してあげるといった空間にしたらいいのでは。

柴田●自分たちで自分たちの使いやすいような空間にする，それをしやすいような仕掛けをつくる，ということですね。文学作品も同じで，緻密に書きすぎるとダメなんです。読み手が補う空白部分がある方が魅力的に感じるんですよね。

秋元●係わる余地を残すことで，何か動きがでるのではと思います。美術館や図書館って係わりようがないというか，動かしようがないという感じじゃないですか。

柴田●いままでの図書館なんか，入って，決まった場所に座って，本を読んで帰るしかないですものね。

秋元●運営している側は，利用者の行動を圧迫するつもりはないと思うんだけど，無言の強制力というか緊張感がありますよね。うちの美術館がわりと敷居が低く見えるのは，動かしてもよさそうな雰囲気があるからだと思います。図書館の場合ですと，そうですね，書架とか，もっと軽い感じでいいと思います。ガラガラと動かせるような。極端に言えば，自分がいる場所に必要な書架を持ってきて，そこに自分の空間を作れちゃうくらいのイメージ。それが実現されると図書館のイメージががらりと変わりますよ。

「ほん和かふぇ。」前にて
秋元館長(左)と柴田館長(右)

柴田●古典的な図書館って，利用者として受動的な存在であることを要求される。そういう造りですよね。これからの図書館は，利用者が能動的存在であることを受け止めてくれる造りが必要ですね。

秋元●そういう造りにすると，ある一定以上の年齢層の人たちにとっては不評だと思います。でも若い人たちはそのほうが面白いと感じてくれると思う。

柴田●その辺りのコンセプトの切り替えがどれくらい出来るか，ですね。図書館でいえばラーニング・コモンズ[*2]の登場が一つの転機だと思うんです。あれで，学習形態が少し変わった。3階のコラボスタジオなど，机を自由に動かせて自分達で集団の形を作れる余地があるので，人気があります。抽象的なレベルで言えば，空間に支配されるのではなく，利用者が空間を自分の用途に合わせて作り変える。そういう仕掛けを図書館の枠組みの中でも，工夫すれば出来るのではないかと模索中です。

秋元●実現すれば，図書館の構造が変わっちゃいますね。歩いている事が楽しい，働きかけると何かレスポンスがある，自分以外の人がいるということが楽しい，そんな状況が生まれると思います。美術館も図書館も出来れば一人で見たいわけじゃないですか。見ているものを独り占めしたい。ところが21世紀美術館は他の人がいたほうがその作品を理解できるような気がする。そこが面白い点です。他の人の観賞方法を見て学んだりとか。一人で黙々とやるのではなく，別の人がいることで能動的になり，ますますやる気になるといった構造をどうやって作るか。これは図書館にも応用できると思います。

―― このブックラウンジや3階のコラボスタジオもそんな場として活用されればいいなと思います。

それぞれの未来

―― 最後に館長としての将来構想をお聞かせください。

秋元●近々の課題は新幹線開通時に向けて，どのような態勢を整えていくか，ですね。確実に来館者は増えると思います。その増えた人数に耐えうるサービスの方法を考えなければならない。1回来てもう行きたくないと思われたらマイナス効果なので，いかにもう一度行きたいと思ってもらえるか。そこが重要だと考えています。

柴田●将来構想ですか…，まず医学系分館の増改築が実現しそうなので，しっかり取り組んでいきたい。それと，自然科学系図書館に設置される環境学コレクションを充実させることです。遠大な構想としては，こういう言い方がいいかどうか分かりませんが，大学がなくなっても残るような図書館を目指したいですね。また空間として大学全体が金沢市に溶け込むような，そんなキャンパスを目指し，その一部を図書館として担っていきたいと考えています。

2010年12月14日　「ほん和かふぇ。」にて

(情報企画課　川井奏美)

＊1　「金沢21世紀美術館 友の会」年会費（大人1人3,000円）を払うと，美術館主催展覧会がフリーパスになる。
＊2　金沢大学附属図書館のラーニング・コモンズについては http : //www.lib.kanazawa-u.ac.jp/kulic/index.htmlを参照